

【紹介】

科学博物館のための博物館学

パリ第7大学ミュージオロジー・シアンティフィック
Muséologie Scientifique à l'Université de Paris VII

水嶋英治*
Eiji MIZUSHIMA

このところ、ヨーロッパにおける博物館学の発展は目覚ましく、人文科学の一分野としてではなく、その工学的側面から、あるいは論理学・数理的側面からも研究され始めている。現在、フランスでは伝統的な博物館学 (muséologie traditionnelle) に対して、新興の「科学博物館学」(muséologie scientifique) がパリ第7大学をはじめ、国立科学研究センターおよびラ・ビレット科学産業都市などの機関で研究が行なわれている。

■ミュージオロジー・シアンティフィック

私たちにあって耳慣れないこの博物館学は、人文科学的な色彩を帯びている伝統的博物館学に対し、科学的手法によって博物館学を体系化しようとする挑戦的かつ実験的な学である。

この学の提唱者のひとり、ラ・ビレットの科学顧問であり、パリ第7大学教授 J-P. Natali によれば、Scientifique (科学的) という語の解釈には二通りある。ひとつの意味は、文字通り「科学的」な博物館学である。

もう一つは「科学系博物館」のための博物館学という二義的な意味である。従来の博物館学が、その主たる対象を美術館や歴史的展示物の多い博物館に限定してきたのに対し、1960年代以降世界各地に登場してきた「先端的な科学技術博物館」や「サイエンスセンター」のような現代的施設をも包含しているところにこの学の特徴がある。またそこにある種の、新興ならではの意気込みが読み取れる。

しかし、「博物館学」のあとに付加されている一義的なシアンティフィックという形容詞は、保存

科学をはじめ資料研究のための X 線解析や年代測定法に用いられている放射性炭素法や熱ルミネッセンス法などの物理化学的な意味での「科学」というよりも、むしろ論理学に代表される論理の展開をいかに図るかということに主眼が置かれているギリシャ時代からのテオリカ (学説・理論) に近い、と筆者には感じられる。

■この学の対象範囲

フランスには世界に誇る科学技術系の博物館「工芸院付属技術博物館」と「発見宮殿」があり、その両者ともラ・ビレットにとってみれば先輩格である。資料をもたない博物館の独自性は「科学知識の普及にあり」としてこの学が登場してきたのはそれなりの背景がある。

おそらく、サイエンスセンターまで含めて、このミュージオロジー・シアンティフィックを考えようという発想は、ICOM の〈Museum〉という定義の変遷によるところが大きいと推測できる。1951年の ICOM 憲章、そして1962年の ICOM の定義 (Statutes) を経て、1974年の定義に初めて「サイエンスセンター」や「プラネタリウム」が博物館の範疇として明確にされた。この比較的新しい博物館分野「サイエンスセンター」、特にラ・ビレットの展示に光を当てたのがこの学であるとも言える。

ある研究者は、サイエンスセンターは博物館の範疇に入っても、博物館学の対象とはならない、という。しかし、ひとつの「学」が「学」として成立するためには、論理構成と展開、研究方法論、そして Terminology (専門用語) が必要不可欠で、これ

* みずしま えいじ

科学技術館学芸員 (現在、フランス国立科学産業博物館/ラ・ビレット科学産業都市勤務)

らの基盤の上に、はじめて「学」としての体系化が図られるべきであり、新興の博物館学はそれに十分応えられる、とこの学の提唱者は反論している。

今日、博物館学は細分化されつつある傾向にあり、エコミュージアムの台頭によってエコミュージオロジーやヌーベル・ミュージオロジー・ムーブマン(新・博物館学運動)の動きがあったりで、この「学」も完全には定着してはいないが、それらの動きのひとつとして捉えることができる。

■パリ第7大学

この新しいミュージオロジーが開講されている大学がある。学生の町カルチュラタンにあるパリ第7大学がそれで、通称「ジュッシュー」とよばれ、第6大学のマリー・キューリー大学と隣接している。両大学とも自然科学・理工学系の大学で、裏手には王立植物園が広がり、その横には国立自然史博物館がずっしりと構えている。

フランスの大学構成は日本に比べて複雑であり、高等教育システムはグラン・ゼコールとユニベルシテ(大学)の2系統に分れている。ルーブル美術館のエコール・デュ・ルーブルは前者であり、専門職養成あるいは技術教育を目的としている。

これに対して、大学はグラン・ゼコールの与える資格もことになっており、1968年の高等教育基本方針法によって、これまで5つの学部(文学・人文学、法学、理学、薬学、医学部)は、より小さなU.E.R. (unité d'enseignement et de recherche) に分割され、それぞれ1つまたは幾つかの専門について特定の教育を行うことになった。U.E.R. とは、同一の専門分野の教官、学生および研究者によって構成されている教育・研究単位である。U.E.R. は個々の単位ごとに教育・研究プログラムや試験方法を決定している。

従来、博物館学はパリ第1大学でG.H. リビエールが講じていたが、ラ・ビレット建設を契機に、科学博物館のための博物館学があるべきだ、と国(CNRS)が本腰を入れ、第7大学の第3課程に、科学系の博物館に関するひとつの講座を開講した。第3課程は一応、日本の大学院課程に相当し、高度専門課程・研究者養成課程である。この博物館学課

程で付与されるディプローム(学位・免状)は専攻内容によって異なるが、主として次の2つである。

□D.E.A (Diplôme d'Etudes Approfondies) 技術教育および研究技術への入門を認定するもの。修学期間は1年。

□D.E.S.S. (Diplôme d'Etudes Supérieures Spécialisées) これは1974年につくられた比較的新しいディプロームで、高度な専門課程の応用分野として直接に職業生活と直結した教育を認定するものである。特定分野における深い知識および技術の獲得を目的としており、修士レベル第2課程終了者が対象で修学期間は1年。この先はドクトラ(博士号)取得のための講座である。

大学でなされる研究自体は、非応用研究の砦という感じがしないでもないが、時勢の必要性に応じてか、変化しつつある。「科学博物館学」講座は科学技術系・理工系博物館の基本使命である「知識の普及」や「難解な知識の適用」に関するプログラムである。博物館学の教育入門指導の役割をはたし、対象としては、展示の企画者、設計者、演出家、科学映画の監督、アニメーション作家、教師、科学・芸術の表現者、と講座案内に記されている。

1987年度の受講生は各方面から集まり、正統的博物館職員(?)は筆者のみで、他は映像作家やルーブル美術館大学の卒業生やラ・ビレットの解説員などであった。中でも異質な受講生はタバコ産業のマーケティング担当者で、難解な生化学やタバコの有害性をいかに平易に解説し、同時に市場拡大を図るか、というなんとも興味深いテーマをもって、これに新・博物館学を応用しようという変わり種であった。

内容をかいつまんで紹介すると、基礎博物館学と概念、最近の研究状況、研究の方法論とテクニック、実地研修として、統計学、調査方法論、ラ・ビレットの展示論、論文作成として科学技術博物館に関する専門的研究論文の指導などである。

講師は、第7大学をはじめ、第8大学、各地の高等師範学校などの各大学からそれぞれの専門分野の講師が受け持っている。